

久埜 百合

What do you like? と尋ねて、I like scabetti. と子どもが答えたら、どのようにフィードバックされますか? No, spaghetti. とわずに、軽く Oh, yes, you like spaghetti. と応ずると、子どもは Yes! と答えて、促さなくても I like spaghetti. と言い直します…とある研修で話していた時に、居合わせた ALT が、Oh, yes, I did that too. My mother still teases me and says 'Shall we have scabetti for lunch?' と応じてくれました。

次の例は、ふざけている!と思われそうですが、抑揚が正しいのでお試しください。Another cup of tea? Yes, please. With milk? No, thank you. と楽しんでいたり取りがいつの間にかアナタカボチャ? になりました。これを聞いて直ぐに Another cup of tea? でしょ、と言い当てたのは、以前 NHK の「とっさの一言」に出演されていた Brian Peck です。May I come in? と教室に入ろうとすると、NO! と拒否。「目、eye、髪?」と最後に髪の毛に触らないと入れてもらえない、というルールを思いついたクラスもありました。子どもの「創造」でわざと「逸脱」している、5年生らしい遊びです。

英語に触れ始めたばかりの3年生も、「創造的な逸脱」を起こすことがあります。He is running. と言った途端に、「ワニ! ワニ!」と男の子が友だちの机の間を走り回ったのです。英語環境の3歳児が私の名前の漢字を見て、自分の名前も漢字で書いて! Please write my name. というのを聞いて、wipe かな? と戸惑ったときのことを思い出し、暫く走るのを見ていました。その後、*Hooway for Wodney Wat* (Helen Lester) に出会い、大いに納得しました。

音素の発音を気づかせて文字とつなげるには9歳前後までが勝負所、と思います。What day is it today? と曜日を話題にする授業で戸惑う様子が見えるのは Thursday ですが、4年生(9-10歳)のクラスで、限りなく /θ/ に似た、それでも次の Friday の /f/ とは明らかに異なる音で Thursday と発音している子どもに気づきました。これは英語圏の子どものほとんどが創り出す発音で、/θ/ が無声音では /t/, /f/, 有声音では /d/, /v/ になるという報告に合致します。Thursday の他にも、three, thirteen, thank you, thirsty 等で /θ/ への転化が起きました。クラス全員が10歳児になるころに、この現象はすっかり消えてしまいます。

ところが、この春、中1の英語指導が始まった直後に数字を綴りで書かせたところ、3を fthree と書いた例があって、勿論、t の誤記として減点されている答案を見る機会があり、オドロキともつかぬ興奮を覚えました。生徒たちが、Thursday の発音について「どうするとあの音になるか?」と話し合っていた、という報告も添えてありました。

伊藤克敏先生が『こどものことば 習得と創造』(1990)の冒頭で R. Jakobson のことば「創造的逸脱」creative deviation を引用されています。日本で育つ子どもが話し始めた時に、「キレクナイ」「チガガデタ」など大人が聞かせたことのない、しかし、多くの子どもが通過する言い方を、これほどの確に言い表す言葉はないと思い、以来30年以上、子どもの「逸脱」を心にとめてきました。しかし、この頃「創造的」ではない、指導方法に起因する逸脱が小学生の間にも起こっている例を見聞きして、気になっています。(語研・参与)

※『こどものことば』は広瀬友紀:『ちいさい言語学者の冒険』(岩波書店)のおすすめ書籍の第一に掲載されている。